

1862年(文久二年)4月、久光は大久保らの献策を受け入れて、
斉彬の遺志であった公武合体を推進すべく
藩の精鋭を引き連れ、上洛することとなった。

ちなみに、西郷が上洛反対の論陣を張り、
久光のことをジゴロと罵ったのはその時である。
結果としては、西郷の反対論は入れられず、
逆に先発した九州地区の情報収集をした上下関で待て、との下命を受けている。

その頃、京都では自藩の討幕過激派が長州等他藩の志士と図り、
一触即発の様子にあった。
下関で久光を待つ西郷に、その情報がいち早く流されてきた。

必要な時、西郷の行動は早い。久光の命令よりも、
自藩の危急存亡、そう判断した西郷は単身京都へ飛んだ。
過激派を抑え、なだめるための京都市行だったのである。

久光と西郷の間柄が親密であれば、誉められたかもしれない。

しかし、実情はその逆であった。

さらに、西郷の思想(日本の将来を考え、
必要とあらば倒幕もやむなし)を危険視している久光側近は、
西郷が自藩過激派を煽動しに京都へ行ったと思ひ込み、
そういう色をつけた報告を久光にしている。

「下関で待て」という藩主の命に背き、
あろうことか自藩過激派を煽るべく京へ出奔するとは……。

この命令違反は、久光を激怒させることになった。

西郷は直ちに捕らえられ、鹿児島に護送されてしまう。

そのすぐ後に、久光の思想的限界が露呈する寺田屋事件が起きている。

西郷が捕らえられ、
抑えの効かなくなった討幕過激派が突出しようとするのを、
問答無用とばかりに自藩の者に上意討ちさせた事件である。

急進過激派の言い分を聞いたり、
少し間をおいて様子を見たりなどない。
また、この事件で生き残った思想面の指導者であった元公卿田中河内介父子も、
鹿児島への護送途中に惨殺されている。

このことで分かるとおり、彼の頭脳は、
日本における薩摩藩の立場と
自分の存在感を示すところに留まっており、
いざとなったら幕府を倒してでも
列強に互することのできる日本にしようとはまでは思いが拡がらない。